

医療と介護のありたい姿 ロードマップ新旧対照表

	新	旧 (令和元年度第3回在宅医療・介護連携推進協議会)
ありたい姿1 本人を第一に考えた多職種連携	<p><u>専門職は、つくば市のありたい姿を共有し、本人・家族や地域の状況を踏まえ、共に最善のアプローチを考え、対応することができている。(多職種は、専門性の背景を超えて、本人の希望や望ましい生活を第一に考えて知恵を出し合う関係)</u></p> <p>2025年の目標 <u>医療と介護の専門職間のコミュニケーションをとることへの苦手意識が低くなっていて、各専門性を十分に発揮し、本人を支援する連携ができている。</u></p> <p>2040年の理想 <u>医療と介護、病院と診療所、診療所と診療所など、地域包括ケアを担う専門職間の連携が、特別な負担なくできる仕組みが完成している。専門職間の顔が見える関係は維持されており、互いに相手の専門性や価値観に敬意を払い尊重しあう関係がさらに深まっている。</u></p>	<p><u>高齢者が自宅で日常生活を送るための医療・介護サービスと、その多職種連携の充実</u> <u>(医師やケアマネなど、誰でも顔が見えて、腹を割って話せる関係づくりと関係者が共通の目標に向かって行く関係づくり。)</u></p> <p>2040年の理想 <u>各医療機関、事業所、そこに属する専門職、行政等の連携が強化されている。</u></p>
ありたい姿2 希望の看取りを共に考える	<p><u>本人や家族の希望に応じて、自宅を中心とする地域の中で安心して最期を迎えることができている。</u> (終活やACPを通じた本人の意思と多職種の理解)</p> <p>2025年の目標 <u>ACPや人生会議を専門職が理解し、当たり前のように本人や家族に説明し、日常的に話題にするようになっている。</u></p> <p>2040年の理想 <u>市民は健康な時から自身の最期のあり方を考えることが当然になっており、看取りの時期までにはそれを専門職と確実に共有することができている。</u></p>	<p><u>自宅で生活する高齢者の看取りに向けた環境作り</u> (終活やACPを通じた本人の意思と多職種の理解)</p> <p>2040年の理想 <u>市民も専門職も自宅での看取りを幅広く行っている。</u></p>

<p>ありたい姿3</p> <p>多様な生活の場の提供</p>	<p>本人は、在宅でも介護施設でも、自分らしく暮らすことができている。 <u>(本人が安心して在宅療養できる医療・介護サービスの充実と自宅生活の延長としての特養等での生活の充実)</u></p> <p>2025年の目標 <u>専門職は、各種の介護施設や介護サービス事業の特色を利用者の視点に立って分かりやすく説明でき、利用者の価値観にあったサービスを選択することを支援できるようになっている。</u></p> <p>2040年の理想 <u>施設サービスの質がさらに向上しており、地域の中で介護施設が今以上に身近な存在となっている。その結果として介護施設に入居後も自宅と変わらないような生活が送れるようになっている。</u></p>	<p><u>介護施設や介護サービスの利用が選択肢となることの周知(自宅生活の延長としての特養等での生活)</u></p> <p>2040年の理想 <u>専門職が介護施設や介護サービス事業所の特色を理解している。</u></p>
<p>ありたい姿4</p> <p>専門職のスキルアップとやりがい</p>	<p>医療・介護の専門職は、働きやすく、やりがいがある環境で専門性を発揮し、本人や家族が望む生活の継続を支援することができる。 <u>(医療と介護の専門職は、やりがいのある魅力的な職種であり、燃え尽きることなく、成長し続けることができる)</u></p> <p>2025年の目標 <u>専門職を対象とした魅力的な研修活動がさらに充実しており、積極的に参加する人が増加している。ケアマネジャーの幸福度をはじめとする専門職のやりがいの指標が向上している。</u></p> <p>2040年の理想 <u>若年人口が減少しても、専門職(特に介護専門職)はやりがいのある職業として、認知され、能力・やる気のある人材が地域の医療・介護を支えている。</u></p>	<p><u>医療介護関係多職種のスキルの向上によるマネジメント力の強化</u></p> <p><u>(医療、介護、福祉に携わる人材育成の強化)</u></p> <p>2040年の理想 <u>本人の意思を尊重し生活を支えることができる力量を持っている。</u></p>

医療と介護のありたい姿 ロードマップ新旧対照表

<p>ありたい姿 5</p> <p>相互に支え合う生活支援・介護予防</p>	<p><u>住み慣れた地域には健康づくりや住民同士がつながる場所があり、高齢になっても、介護が必要になっても地域の中で役割がある。</u> (世代を超え、支え合うコミュニティが地域の身近にある)</p> <p>2025年の目標 <u>地域の身近な場所で、住民主体による介護予防や助け合いの取り組みの参加者が増えている。</u></p> <p>2040年の理想 <u>市民は、地域の互助による自発的な活動に参加していて、若い世代も介護予防や助け合いの活動に積極的に参加している。</u></p>	<p><u>高齢者に関する地域での支え合いと介護予防の強化</u></p> <p><u>(地域でのつながりや介護予防事業の適切な実施により高齢者が活動を継続)</u></p> <p>2040年の理想 <u>介護予防の取り組みが地域の身近な場所で受けることができている。</u></p>
<p>ありたい姿 6</p> <p>認知症になっても安心して暮らせる地域</p>	<p><u>認知症になっても住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられる。</u> (地域住民・医療介護の専門職・行政等の総力による認知症の人や家族との関わり)</p> <p>2025年の目標 <u>各専門職が携わっている認知症の方の変化の気付きや対応力が向上し、本人を支援するチームの支援力も向上している。</u></p> <p>2040年の理想 <u>地域での見守りに加えて、ICT やロボットなどのつくば市ならではの技術を実装活用することで、多数の認知症の人が住み慣れた場所で安心して生活することができている。</u></p>	<p><u>独居高齢者の見守りや認知症高齢者の適切な対応</u> (支援が必要な独居や認知症の高齢者への行政・事業者・地域による支援)</p> <p>2040年の理想 <u>一人暮らしでも認知症になっても、ICT やロボット等を用いて、安心して生活することができている。</u></p>

<p>ありたい姿 7 誰一人取り残さない</p>	<p><u>誰一人取り残されず、一人ひとりの安心が守られ、地域の隅々まで医療と介護、生活支援がいきわたり、自分らしく生きることができている。</u> (医療や介護を拒否する人にも支援に繋がり孤立している人がいない)</p> <p>2025年の目標 <u>地域包括支援センターは市民、民生委員、専門職等と連携して、地域の潜在的な課題を発見し、予防的に支援することができている。</u></p> <p>2040年の理想 <u>全ての高齢者は、地域包括支援センターと顔が見える関係で繋がっていて安心して生活できている。</u></p>	<p><u>医療介護サービスにつながらない高齢者を見つけていくためのコミュニケーションの強化</u></p> <p>(医療介護サービスの利用を進めるための地域内のコミュニケーション力の向上)</p> <p>2040年の理想 <u>本人も家族も専門職も地域の支え手も地域で顔が見える関係ができている。</u></p>
<p>ありたい姿 1〜7</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 本人を第一に考えた多職種連携 2 希望の看取りを共に考える 3 多様な生活の場の提供 4 専門職のスキルアップとやりがい 5 相互に支え合う生活支援・介護予防 6 認知症になっても安心して暮らせる地域 7 誰一人取り残さない 	<ol style="list-style-type: none"> 1 <u>医療介護サービスの充実と多職種連携</u> 2 希望の看取りを共に考える 3 多様な生活の場の提供 4 専門職のスキルアップ 5 相互に支え合う生活支援・介護予防 6 <u>独居高齢者と認知症高齢者</u> 7 誰一人取り残さない
<p>注釈</p>	<p>※ 専門職＝医療職、介護職（福祉職）の総体 ※ 「2025年の目標」と「2040年の理想」について 現在、団塊の世代が75歳以上となる「2025年」を見据えて、医療・介護が必要な状態となっても住み慣れた地域で暮らし続けることができるよう、医療・介護・予防・住まい・生活支援が包括的に確保される地域包括ケアシステムの構築に取り組んでいます。 また、団塊のジュニア世代が65歳以上となる「2040年」には、高齢人口がピークを迎えると共に、医療・介護ニーズの高い85歳以上人口が急速に増加することが見込まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・団塊の世代（1947（昭和22）年～1949（昭和24）年生まれ） ・団塊のジュニア世代（1971（昭和46）～1974（昭和49）年生まれ） 	